

## 大学闘争の真ただ中の一寮生の回想

(45 電工) 若松秀俊

東京医科歯科大学 名誉教授

先日、深作三郎(38 応化)先輩から、大学闘争時の寮の様子を尋ねられた。しかしながら、学生運動そのものの正確な内情は確かな証拠を元に記述する必要があること。とくに個人を記述する場合には、注意深くあらねばならないし、実際に大学の学生部のいわば「学生の非公然活動の調査」が直接の眼目であったことが学生のストライキの原因であったからである。したがって、闘争中は寮内でも互いに疎遠な形の付き合いに次第に陥った経過の中で、「寮長や会計の役割」、「誰の指導？誰の指揮？で寮祭などを行うのか」を決める様相になり「学生の置かれた身の位置」の差を含めた議論があった。その末に、寮祭だけでなく、それに続く寮生大会や先輩とのコンパなどについて、それ以前の昔ながらの先輩からの指示を仰ぐ風習は、上級生、下級生とも「平等な身分」の標榜からいって、すべて消滅した。しかし、寮の役割はなおも存続し、とくに学生の厚生にあるとされ、学生部からの通達、連絡そして厚生課からの学生アルバイトの紹介に限定され、寮生活動は原則的に、統一的に一つの寮で行われるように方向づけが大学により定められた。そんな中でなおもしばらく存続した旧寮舎にわずかに残った行事は、「祝入寮」から「祝入闘」に名を変えた入寮儀式がありその写真が一部残っている。他には、学生アルバイトの仲介は自主的な存続になった。したがって、それまでの恒例行事を具体的に指導できる立場にあった新3,4年生は結局は、新1,2年生に伝統の引継ぎをすることができず、挙句の果てに寮長が保管していた、ハードカバーからなる寮生各自のサイン入りの言葉の学外への紛失を恐れて、人知れず廃棄されたと聞いている。これが寮祭や追いコンを通じて、わざわざ寮に宿泊してくれた先輩との直接交流の機会と翌日の「朝食」での対話の機会を後輩はすべて失った。昭和44年はもはや寮祭がなかった。前年の催しが最後で近隣との交流も途絶えた。

昭和43年後期は小生が寮長であった。何度か臨時寮生大会があったが、意見の統一にはならなかった。翌年度は昭和42年入学の寮生が半期ずつ寮長であった。学生は時にクラス会や工学部学生大会に参加し、自主講座による教育を論じたこともあったが、結局は単なる思想学習会に終わった。外部から社会的に著名な人を講師に呼びよせたこともあったが、世論との関係で論じられたことで、当然のことながら学生の学ぶべき学問領域からは程遠い内容であった。このころは「名教自然」のある工学部正門には簡



昭和 44 年入学生の入寮式



闘争への誓い



入闘争歓迎 弘南寮幕ともに



称名寺での記念撮影

略体文字のプラカードが立ち並び、教室はバリケード封鎖されていた。当時の大陸と関係深いセクトから供給された指導者の肖像の紙レットルが貼りつけられた比較的大きな缶詰が学内の学生に食糧として提供されていたのを記憶している。中身は、茶汁に浮かぶ凍み豆腐の煮つけであった。大陸で起った酷い食糧難の時期に符合する。

東京大学の入試が中止になったのは、昭和44年であった。寮生のうち、留年生が続出したのは、昭和44年卒業予定の前に単位不足で追試を待ちわびる学生と翌45年末までに不足単位を揃える予定にあった学生であった。弘南寮の名簿を見るとわかるが、取得単位に問題のなかった少数の学生以外に、少なからず留年している。この時期の寮生の名が卒業年に合わせて記録されているのはそのためである。ちなみに、最長在寮期限を4年と決めてあったので45年に留年・退寮者のうち41年入学の入寮者で45年卒業・退寮者は小生のみであった。同窓会で顔を合わせるとき、入学年度で区別する先輩・後輩の厳然たる順序付けのけじめを守るべき敬称の扱いは今もなお続いている。

(文中敬称略) 記述誤りがあれば、著者にご指摘願います。令和2年9月20日